

東日本大震災 | 連続ルポ1 | 動き出す被災地

Great East Japan Earthquake | Serial Report 1 | Devastated Areas Have Just Started to Stir — no.1

わたしたちにできること

What We Can Do

陶器浩一
Hirokazu Toki

構造家、滋賀県立大学教授 / 1962年生まれ。1986年京都大学大学院修士課程修了。1986～2003年日建設計。滋賀県立大学助教授を経て現職。構造設計作品に「キーエンス本社・研究所ビル」「積層の家」「清里アートギャラリー」「海光の家」「半居」「Looptecture 福良」ほか。2001年松井源吾賞受賞。2008年日本建築学会賞(技術部門)受賞

「竹の会所 ―復興の方舟―」は、気仙沼市本吉町において、地域に生息する竹を使って学生たちが自力でつくり上げた建築である。

現地在住の(株)高橋工業・高橋和志社長や地域の皆さんと共に準備を進め、学生たちが自給自足でキャンプ生活を送りながら完成させた。

竹の特徴を生かしていかに架構したか、学生たちの頑張り、共同生活の様子など、書きたいことは尽きないが、ここでは活動に至った経緯、今回の活動を通じて感じたことについて記したい。

きっかけ

震災ひと月後に高橋工業応援団として見舞ったとき、「自分たちのことよりも、息子たち、孫たちに胸を張れる地元を残さなくてはならない」という高橋さんの言葉に強く胸を打たれ、津波で「みんなが集まる場所もなくなってしまった」とお聞きしたとき、わたしたちに何ができるかと悩みながらも、このプロジェクトを決意した。

震災後、流された集会所の再建や修理を行政に要望しているものの、早くても4年はかかるだろうとの回答だったとのことである。

わたしたちには資金力も権力もないが、学生たちの若い力、エネルギーがある。

設備もない仮のものであるが、学生たちが力を合わせて“憩い”の場をつくり、少しでも地域の皆さんのお役に立てれば、という思いからであった。

試行錯誤

早速大学に帰って話をしたところ助教の永井拓夫さんや多くの学生が賛同してくれ、気仙沼と大学を往復する日々が始まった。以前イベント会場を竹でつくったが建築は初めてである。今までの研究蓄積に加え、地域で生息する竹を現地で調査し、大学に持ち帰って実験・検討を繰り返した。竹の接合は地元の漁師さんや農家の方のお知恵も拝借し、学内で実物大モックアップもつくって急ピッチで設計を進めていった。

確認申請は、建築基準法第85条の5に基づく仮設建築物、集会所として確認を得た。供用期間は4年、木造等(竹造)1階、延床面積175m²の建築である。竹の構造はおそらく前例がないが、3年前から研究を積み重ねてきた竹構造の実験、研究結果と、今回の検討内容、プロジェクトの経緯を主事にご説明したところ意気に感じてくださり受け付けてくださった。動的解析に基づく構造計算を行い、参考として提出している。

二転三転

われわれの提案が地元住民すべてにすぐに受け入れられたわけではない。当

初、二つの自治会が共有していた集会所近くに計画したが、自治会間の被害格差が問題になった。この集会所は大きな被害は免れたものの修理もできずに放ったらかし状態になっている。仮設とはいえ別の場で建設するということは、被害の大きかった地区を見捨てることになるという意見である。隣の地域は集会所が完全に流失し、地元の伝統芸能「平磯虎舞」の練習場もなくなると聞き、場所を変更した。ところが、行政に申請する前日の寄合でストップがかかった。設備や備品が整っていないならば使いにくい、行政が建ててくれるまで待とう、という住民がいたらしい。震災直後は同じ被災者だったが、時間が経つにつれ温度差がはじめてなかなか意見がひとつにまとまらない。合意形成というものの難しさを痛感した。

結果、自治会のものとしては建てないことになったが、自宅も父親も津波で失った男性が、自分の土地の提供を申し出てくれた。長年続く網元のお屋敷で、父親が亡くなった場所を、である。「完全な集会所を最初から求めるのではなく、できることから少しずつ始めませんか。何もしないと何も始まらないのだから。わたしの土地でよければ使ってください」と笑顔でおっしゃられたがその奥には相当の覚悟があったはずである。

学生たちの頑張り——嵐を乗り越えて

9月、10月にかけて合計28日間、常時30名近く、延べ70名の学生が高橋さん宅の裏庭にテントを張らせていただい



[撮影：堀田貞雄、陶器浩一]



建設を進めた。

学生たちは旅費も生活費も道具も自前の完全ボランティアである。募集時に「参加すれば単位認定になるのでしょうか」と聞いてくる学生もいたがそれなら結構と断った。

志が高い学生たちが集まっているので結束力も固い。工事はすべて手作業で難航を極めた。急斜面での約1,000本の竹伐り。基礎代わりの土のうに使う600袋16トンの土の袋詰め。約10m高台にある敷地への車路は津波で流されているので竹をはじめ資材はすべて人力で持ち上げなければならない。竹フレーム構築もすべてロープで縛り上げるので時間がかかる。

自主的に朝6時作業開始を申し出て遅れを取り戻してくれた。嵐の中でも泥だらけになりながら黙々と作業を続けた。そして、ようやくフレームが立ち並んだと思ったときに台風の直撃を受け、建て方途中のフレームはなぎ倒されてしまった。それでも学生たちはあきらめなかった。

虎舞披露——子どもたちの笑顔

10月23日は参加した学生たちにとっても一生忘れられない日である。

地域の方々から、学生たちのひたむきな姿へのせめてもの感謝の気持ちとして、竹の会所竣工の場で、平磯虎舞の震災後の初練習を披露したいとの申し出があったのである。

当日は朝まで降っていた雨もビタリとやんで晴れあがり、100名近い観衆と共ににぎやかな会となった。

演奏後、集まった子どもたちが竹のデッキを走り回ったり、寝転がったりす

る姿が印象的だった。本当に地域の役に立つかという不安も抱きながらきたので、子どもたちの満面の笑顔と元気な姿は、ここまでやり抜いた学生たちの心にずっと残っていくと思う。

工事中、毎日のように現場を訪れる男性がいた。上棟式の餅まきのときにはご祝儀を持ってきてくれ、竣工披露でも真っ先に「これからはわたしたちがこの建物を大事にしてゆきます」と声を掛けてくださった。その方が、当初一番反対されていた方だと後で聞いたときは込み上げてくるものがあった。

わたしたちにできること

今回の活動にあたり、高橋さんとわたしが固く決めていたことがある。

それは、この地を“復興のシンボル”≡観光名所にはしない、ということであった。

海沿いの国道に面していることもあり、工事中、全国紙やTV局など多くのメディアが取材に来た。が、以前からこのプロジェクトの経緯や事情を理解してくださっている方以外はすべて取材をお断りした。

興味本位で取り上げられては、かえって地域の皆さんの迷惑になるからである。

ある地域での被災住民と建築家との会話を耳にした。

「被災地はボランティアを暖かく迎え入れるべきだ(迎え入れて当然だ)。わたしたちはそういう地域にしか行きません。素直に迎え入れることができないような地域は社会から見捨てられますよ」「一生懸命頑張っているボランティアたちに報いるため、どんどんマスコミにアピールして取り上げてもらわないといけない。それが彼らの勲章となるのだから」。とんでもない話である。一体誰のための、なんのためのボランティアなのか?

これは極端な例であろう。しかし、わたしたちの心のどこかにそういう意識が

潜んでいることは否めないかもしれない。

今回の活動を通じて痛感したのは「そっと寄り添う」ことの難しさである。

「被災者の立場になって」と言うのは易しいが、いくらわかったつもりであっても被災者の心にはなりきれない。頑張りたくても頑張れない人もいる。忘れようとしても心の傷が癒えない人もいる。人それぞれペースが違う。そういう方々にいかに向き合い、いかに寄り添えばいいか。正解はないが、常に考えなければいけない問題である。

これから

「竹の会所」は地域の皆さんに使っていただける状態になった。しかし、まだ電気も水もない。供給可能になったとして、維持費をどこから捻出するか。自治会で維持するだけの体力はまだないし、可能だとしてもほかの集落の人が使いにくくなる。個人に頼るには負担が大きすぎる。行政に頼ってもらちが明かない……。そんな話を高橋さんとしていたとき、傍らで聞いていた学生たちが「竹の会をつくりませんか」と声を上げてくれた。今回参加してくれた学生たちが主体となって全国から会員を募り、竹の会所を維持してくれる。

「一人ひとりでは小さな力でも、みんなの力を合わせれば、大きな力となります。この自力建設プロジェクトを通じてそれを実感しました。……4年間は整備・メンテナンスなどこの会所を通して、地域の方々と未来を築ける場をつくり続けようと思っています。……この会所を通して、わたしたちの思いとみんなの思いが形となり、気仙沼の方々の心の支えとなれば幸いです」。「たけとも」と名付けられた会(<http://yaplog.jp/taketomo2011/archive/2>参照)の設立趣旨文に書かれた一文である。

打算も思惑も見返りもない学生たちの純粋な心。

復興支援に一番大事なことを学生たちに教えられた気がした。